

『現代の聖典』 一部修正について

解放運動推進本部
教 学 研 究 所

このたび、『現代の聖典』における『観無量寿経』序分・禁母縁きんもえんに関する文意もんい（36～40頁）および要語解説の中の項目「旃陀羅せんだら」（89～90頁）について、一部修正する。

二〇一三年一月十三日、部落解放同盟広島県連合会（以下、広島県連）から、『現代の聖典 学習の手引き』の中の解説の一部に、事実誤認と

修正すべき点があるとの指摘を受け、あわせて『観無量寿経』序分の「是旃陀羅」の語のもつ差別性について改めて提起がなされた。その後、宗門は、「部落差別問題等に関する教学委員会」での検討を踏まえ、本問題を周知していくために、是旃陀羅問題学習テキスト『御同朋を生きる』を作成した。

学習テキストの作成にあたり、二〇二二年十月に是旃陀羅問題学習資料編纂委員会を立ち上げ、広島県連との対話を重ねつつ、「是旃陀羅」解釈の歴史を中心に問題点を整理した。そこで明らかになったことは、私たち宗門が、インド社会で成立した身分階級における差別言辞げんじである「旃陀羅」をもって、日本社会の被差別部落の人々を差別してきた歴史

である。『観無量寿経』序分・禁母縁に説かれる「是旃陀羅」について、誤った受けとめのままに長い間、教化の営みをしてきた。江戸時代の宗学においては、「旃陀羅」を日本の被差別民衆に譬え、加えて暴悪なものという意味を重ねて解釈した。さらに明治以降には、「母親殺しは旃陀羅のすること」といった、実態のともなわない新たな差別観念を生み出し流布してきたことで、長年にわたって被差別部落の人々に耐え難い苦しみを与えてきたのである。そして、この解釈は『現代の聖典』の文意（36～40頁）および要語解説の中の項目「旃陀羅」（89～90頁）にも踏襲されている。

宗門の重ねてきた歴史的罪責を踏まえて、改めて『観無量寿経』序分

と真正面から向き合い、禁母縁について訂正した新たな現代語訳を提示した。これは現時点での取り組みの成果である。今後も真宗同朋会運動のテキストとして、『現代の聖典』を通した『観無量寿経』序分の学びを進めていくとき、禁母縁の訂正現代語訳と、その解説等を明記した、是旃陀羅問題学習テキスト『御同朋を生きる』（70～88頁）をあわせて活用いただきたい。そして、宗門に関わる一人ひとりが本問題を整理し、「是旃陀羅」という語を含む『観無量寿経』序分をどのように受けとめていくのかを考えるに際して、いかほどの指針となれば幸甚である。

■ 『観無量寿経』 序分の概略

『観無量寿経』 序分は、王舎城おうしゃじょうの悲劇を物語ることからはじまっています。ここに、『観経』 序分の禁母縁までの概略と、「是旃陀羅」の語が説かれている禁母縁の書き下し文と現代語訳を示して、「是旃陀羅」という語がどのような脈絡で説かれているのかを確認していただくことにします。まず概略は以下のようである。

釈尊じやくそんの親族（従弟）である提婆達多だいばだつた（調達じようだつ）は、仏弟子となったが、名聞みやうもんの心に負け、釈尊に取って代わり僧伽そうがを支配しようとした

た。そして自分の世俗の支援者となつてもらおうとマガダ国の王舎城の王子阿闍世あじやせに近づき、阿闍世に父王を殺して王位を奪うように唆そそのかした。その提婆達多きようたの教唆きようさにしたがつた阿闍世は、父王頻婆娑びんばしや羅らを幽閉ゆうへいして、誰も近づけないようにした。

母后韋提希ぼこうは、牢獄に行つて密かに食事を運んだ。そして頻婆娑羅は、釈尊に、目連もくれんを遣わして八斎戒はつさいかいを授けてくださるようお願い、釈尊は、願いに応じ、さらに富楼那ふるなをも遣わして法を説き聞かせた。

善導ぜんどうによる序分の区分にしたがえば、ここまでが禁父縁きんふえんと言われる一段である。次に、序分の禁母縁と名づけられる一段がつづく。

頻婆娑羅を幽閉して王位を奪った阿闍世王は、母が父に食物をとどけているためにいまなお父が生存していることを知った。阿闍世王は、賊である父を助ける母も賊だと怒って、剣を抜いて母を殺そうとする。そのとき大臣たちはそれを止めようと、王に向かつて、刹利種せつりしゅめを汚けがすものは「旃陀羅」であると諫いさめた。阿闍世王は、大臣たちの離反を恐れ、殺害を思い止とどまり、母を幽閉した。

〔御同朋を生きる〕 5～6頁から抜粋

■ 『現代の聖典』における文意と要語解説

以下、『現代の聖典』における、禁母縁の「文意」の修正と、要語解説の中の項目「旃陀羅」の改訂を提示する。

(一) 『観無量寿経』 序分禁母縁・文意（現代語訳） 『現代の聖典』 36～40頁

そのとき、阿闍世は、牢獄の門衛に、「父王はいまなお生きてるだろうか」とたずねました。そこで、牢獄の門衛は、「大王よ、この国の大夫人韋提希様が、蜜で練った麩しやう（麦こがし）を身体に塗りつけ、飾りものに葡萄ぶどうの汁をいれて、王に差しあげています。また

仏弟子の目連や富楼那が、空中からやってきて、王のために法を説いています。とても止めることはできません」と答えました。

そのとき、阿闍世は、これを聞いて、母を怒り、「我が母は国賊だ。国賊をたすけているとは。仏弟子の沙門しゃもんたちは悪人だ。人を惑まどわす呪術をもちいてこの悪王を何日も生かしているとは」と言い、すぐに鋭い剣を手にして、母を殺害しようとしています。

そのとき、聡明そうめいで知識のある月光がっこうという名の一人の大臣が、大臣の耆婆ぎばとともに、王に礼拝して言いました。「大王さま、私どもは、ヴェーダの論典にこのように説かれていると聞いています。世界の初めよりこれまで、多くの悪王がいて、国王の位を貪って父を

殺したものが一万八千にもなると。しかしいまだかつて（クシャトリヤの道はずれて）無道に母を殺したということは聞いたことがありません。王がいまそのような殺逆せつぎやくをなせば、クシャトリヤ種しよ姓じやうを（その罪で）汚すことになります。私ども臣下には聞くに堪えられません。この（クシャトリヤ種姓を汚す）ものは「チャンダラ」です。そうなつては、もはやあなたはここに住じゅうすることができません。」

そのとき、二人の大臣は、このように言い終わって、劍の柄えに手をかけて後しりぞずさりしながら退いていきます。そこで、驚き恐れ動揺した阿闍世は、大臣耆婆に「汝は私の味方ではないのか」と言う。

耆婆は「大王よ、母を殺してはならない」と重ねて言います。この言葉を聞いて、阿闍世王は、過ちあやまを悔い助力を求め、すぐに剣を捨てて、母を害することを思いとどまりました。そして王宮の役人に命じて、宮廷奥深くに母を閉じ込めて、再び外に出られないようにしました。

(『御同朋を生きる』 7～9頁から抜粋)

(二) 要語解説「旃陀羅」〔『現代の聖典』 89～90頁〕

『真宗聖典』の『観無量寿経』では「旃陀羅」と表記されているが、漢訳經典の多くは「旃陀羅」と音写している(「旃荼羅」などと表記する場合もある)。ここでは「旃陀羅」と表記する。

「旃陀羅」とは、インド語の「チャンダーラ」(candala)の音写語で、もとは古代のインド・アーリア社会において蔑視された先住民部族の中の一つの部族名であったと考えられる。

インドでは紀元前八〇〇年ころ、ブラーフマナ(司祭者階級)、クシヤトリヤ(王族戰士階級)、ヴァイシヤ(庶民階級)、シュードラ(隸民階級)の四つの身分からなるヴァルナ制という階級制度(カースト制度)が形成された。さらに前六〇〇年ころまでに、階級を維持するために、その階級から排除された最下層に、のちに「不可触民」(アウトカースト)と見なされる最不浄の身分が設けられた。その最下層の「不可触民」に貶められ、位置づけられたのが「チャンダーラ」である。

「チャンダラ」という語は、中国に伝わり、「嚴熾ごんし、執悪しゅうあく、陰悪けんあくにん、執暴悪しゅうぼうあくにん、主殺しゅさつにん人、治狗じくうにん人、屠者としゃ」などという「暴悪なもの」と解釈された。そして日本においては、「旃陀羅」を被差別民衆である「穢多えだ」にたとえて説明し、被差別民衆に対する差別を一層増長することになった。

また、江戸宗学以来、中国の解釈にのっとり、「無道害母むどうがいも」の「無道」を、「旃陀羅は暴悪なもの」という意味に結びつけて理解してきた。すなわち、阿闍世が無道に母を殺すならば、「旃陀羅」が暴悪なものであるのと同じく、阿闍世もその点で「旃陀羅」と同類であり、「人倫じんりんに悖もとる（背く）」から「是れ旃陀羅なり」と言われているという解釈である。

他方で、父王殺害は悪逆であるにもかかわらず大臣に黙認され、母殺害だけが無道だと押し止められているという問題がある。この点をふまえて、どう読むべきかは江戸宗学においてすでに取り上げられていた。

その詳細については『御同朋を生きる』74頁（母殺害の理由）を参照されたい。

『観経』禁母縁には、阿闍世が怒りにまかせて「我が母はこれ賊なり」と発言したと説かれている。その怒りは王位篡奪さんだつのための父王殺害を母に妨害されたことによるのであり、それによって母を「賊」と言ったのである。したがって、阿闍世は王位篡奪を邪魔だてする母を「国賊」として殺害しようとしたのであり、「人倫に悖る」という意味で「悪逆無

道」に殺害しようとしたのではない。

このような阿闍世に対して、月光大臣は『毘陀論經』を引き合いに出し、ヴェーダの宗教にしたがった王侯社会の規範をまず示し、その慣習法には王位篡奪のために、母を「国賊として」害することがこれまであったためしがないと訴えている（未曾聞有）。つまり前例のない、「国賊として」母を罰するということが、クシャトリヤの道にはずれることであり、それを「無道」と言っているのである。そして、クシャトリヤの道にはずれるような殺害をなせば（為此殺逆之事）、クシャトリヤ種姓を汚すことになる（汚刹利種）というのである。

クシャトリヤ種姓を汚し不浄をもたらすものに対しては、たとえそれ

が王であれ厳正に処置されなければならない。それは、クシャトリヤ種姓に生まれた大臣たちにとって、ヴァルナ社会の秩序の乱れを阻止する義務と言える。そこで大臣は、阿闍世王に向かって「是れ旃陀羅なり」と言ったのである。したがって「是れ旃陀羅なり」の語は、「旃陀羅のようなものだ」という比喩表現ではなく、「クシャトリヤ種姓を汚すものは、不浄の「チャンダーラ」身分としてこのヴァルナ社会から追放します」（是旃陀羅不宜住此）という断定表現としての諫言なのである。